

〈研究ノート〉

ヴァスバンドゥにおける縁起の法性について

松 田 和 信

筆者はこれまでヴァスバンドゥ（世親）の著作中で「縁起」に関する記述に関心を持って関連する箇所を眺めてきた。縁起という、時間的に先立つものに依存して別の物が生じるという、時間の流れの枠内でのみ理解することが要請されたはずの仏教の根本原則に対して、やがては仏教教団内部でも、縁起という概念自体を、空間的なものであるとか、相互に依存しあう関係であるとか、あるいは、さも何らかの実在する真理概念のような、自然の、すなわち非人為的な無為法であると主張する傾向が現れたことは良く知られている。ここでは、それらの縁起理解にかかわる問題を、ヴァスバンドゥ自身がどう解説し、どう批判してゆくかを、『俱舎論 (*Abhidharmakośabhāṣya*)』およびそれに続く一連の著作の一つである『縁起経釈 (*Pratītyasamutpādayākyā*)』の記述を紹介しつつ、この機会に短い研究ノートとしてまとめておきたい。

ヴァスバンドゥの著作順序 恐らくヴァスバンドゥは、現存はしないが『七十真実論 (*Paramārthasaptati*)』というサーンキャ学派批判の著作から始めて¹⁾、次に『俱舎論』を著して、説一切有部教団 (*Sarvāstivādin*) の教義を批判的に体系化し、その次に『釈軌論 (*Vyākhyāyukti*)』を著し、その中で、了義 (*nītārtha*)・未了義 (*neyārtha*) を峻別しさえすれば、大乘經典を含むすべての經典を仏説として読むことができることを示し²⁾、次の『成業論 (*Karmasiddhi*)』では、ある経量部 (*Sautrāntika*) の人が主張しているという形を取って、業 (*karman*) の担い手としての「異熟識 (*vipākavijñāna*)」すなわちアーラヤ識 (*ālayavijñāna*) を記述しながら、その存在を批判せず、さらにその次の『縁起経釈』では、経量部的立場に立ちつつも、アーラヤ識説を前提に、説一切有部の「三世兩重の因果」説を捨て去り、唯識学派に特有の、いわゆる十二支縁起の「二世兩重の因果」説を導入し、さらに次の『唯識二十論 (*Viṃśatikā*)』、そし

1) カマラシーラの *Tattvasaṃgrahaṇīkā* の第7章 (*Ātmaparīkṣā*) においてこのタイトルのみ言及されている (Krishnamacharya ed. in *GOS*, vol 1., p. 129, Shastri ed., vol. 1, p. 164)。

2) 拙稿「教説と意味—釈軌論第4章より—」『大谷学報』63-1, 1983, pp. 79-80。

て最後には兄のアサンガ（無著）から受け継いだ唯識思想を祖述する『唯識三十論 (Triṃśikā)』の著作へ進んで行ったと思われる。この中でも、特に「釈軌論⇒成業論⇒縁起経釈」というヴァスバンドゥの著作順序は、『成業論』において『釈軌論』がその書名を掲げて言及され、さらに『縁起経釈』の中で『成業論』がその書名を掲げて引用されるという事実から判断しても確実であると思われる³⁾。

俱舍論 これらのヴァスバンドゥの著作中、縁起にかんする記述で、ここで取りあげるものは、『俱舍論』と『縁起経釈』の二つであるが、まず『俱舍論』では縁起を無為法と見る異説が次のように現れる⁴⁾。

他の部派の人々は「縁起は無為である」と言う。「諸々の如来が誕生するしないにかかわらず、この法性は確定している (utpādād vā tathāgatānām anutpādād vā sthitaiveyaṃ dharmatā)」という経説があるからである。このことは「この経説におけるブッダの」意図 (abhiprāya) から「判断すれば」その通りでもあり、またその通りでもない。ではまずどのようにしてその通りでもあり、どのようにしてその通りでもないのか。もしこの「経説の」意図が「諸々の如来が誕生するしないにかかわらず、常に無明等に縁りて行等の生起があるのであって、縁らずしては、あるいは他のものに縁りては決して「行等の生起は」ないから、従って「縁起は」常住なるもの (nitya) である」と言うのであれば、その通りであると把握されるべし。あるいは、この「経説の」意図が「縁起という何らかの常住なる別の存在 (bhāvāntara) がある」と言うのであれば、その通りではないと否定されねばならぬ。何故か。「生起 (utpāda)」には有為の相があるからである。また無常なるものの相が常住なる別の存在であるのは不合理だからである…後略。

因縁相応の二經典 『俱舍論』中に引用される「諸々の如来が誕生するしないにかかわらず、云々」という阿含の典拠については、『雜阿含』「因縁相応」のふたつの經典が候補としてあげられる。両經の関係部分をその前後も含めて示すと次のようである⁵⁾。

A「因縁相応 (NiS)」第14經 (Pratītya=雜阿含 296) cf. Pāli SN, xii. 20, *Paccaya*

3) 拙稿「Vasubandhu 研究ノート (1)」『印度学仏教学研究』33-2, 1984, pp. 1039-1042.

4) AKBh, p. 137, l. 14 ff.

5) パラグラフ番号は Tripāthī ed. に示されるものをそのまま挿入する。実線と点線による下線については後で説明する。

(14.1) *pratītyasamutpādaṃ vo bhikṣavo deśayiṣye pratītyasamutpannāṃs ca dharmān / tāñ chr̥ṇuta sādhu ca suṣṭhu ca manasi kuruta bhāṣiṣye* / (14.2) *pratītyasamutpādaḥ katamaḥ / yadutāsmin satīdaṃ bhavaty asyotpādād idam utpadyate / yadutāvidyāpratyayāḥ saṃskārā yāvat samudayo bhavati* / (14.3) *avidyāpratyayāḥ saṃskārā ity utpādād vā tathāgatānām anutpādād vā sthitā eveyaṃ dharmatā dharmasthitaye dhātuḥ / taṃ tathāgataḥ svayam abhijñāyābhisambuddhyākhyāti prajñāpayati prasthāpayati vibhajati vivaraty uttānikaroti yadutāvidyāpratyayāḥ saṃskārāḥ* / (14.4) *yāvaj* (14.5) *jātipratyayaṃ jarāmaraṇam ity utpādād vā tathāgatānām anutpādād vā sthitā eveyaṃ dharmatā dharmasthitaye dhātuḥ / taṃ tathāgataḥ svayam abhijñāyābhisambuddhyākhyāti prajñāpayati prasthāpayati vibhajati vivaraty uttānikaroti deśayati saṃprakāśayati yaduta jātipratyayaṃ jarāmaraṇam* / (14.6) *iti yātra dharmatā dharmasthitatā dharmaniyāmatā dharmayathātathā avitathatā ananyathā bhūtaṃ satyatā tattvatā yāthātathā aviparītātā aviparyastatā idampratyayatā pratītyasamutpādānulomatā ayam ucyate pratītyasamutpādaḥ* / (14.7) *pratītyasamutpannā dharmāḥ katame / avidyā saṃskārā vijñānaṃ nāmarūpaṃ ṣaḍāyatanam sparśo vedanā tṛṣṇā upādānaṃ bhavo jātir jarāmaraṇam / ima ucyante pratītyasamutpannā dharmāḥ / ...*

B「因縁相応 (NiS)」第 17 経 (Bhikṣu = 雑阿含 299) パーリ対応経なし

(17.1) *anyataro bhikṣur yena bhagavāṃs tenopajagāma / upetya bhagavatpādaḥ śirasā vanditvaikānte 'sthāt / ekāntasthitaḥ sa bhikṣur bhagavantam idam avocat* / (17.2) *kin nu bhagavatā pratītyasamutpādaḥ kṛta aho svid anyaiḥ* / (17.3) *na bhikṣo mayā pratītyasamutpādaḥ kṛto nāpy anyaiḥ* / (17.4) *api tūtpādād vā tathāgatānām anutpādād vā sthitā eveyaṃ dharmatā dharmasthitaye dhātuḥ / taṃ tathāgataḥ svayam abhijñāyābhisambuddhyākhyāti prajñāpayati prasthāpayati vibhajati vivaraty uttānikaroti deśayati saṃprakāśayati* / (17.5) *yadutāsmin satīdaṃ bhavaty asyotpādād idam utpadyate / yadutāvidyāpratyayāḥ saṃskārā yāvat samudayo nirodhas ca bhavati //*

『俱舍論』に言及されるフレーズは、かつては上記 A の「因縁相応」第 14 経に対応するパーリ相応部 xii.20 (*Paccaya*) が典拠とされて、恐らく仏教の縁起説を扱う諸先学の論文の中で高い頻度で取り上げられ、「縁起の理法」といったニュアンスを表す経文であると見なされてきたものである。しかし、ここでヴァスバンドゥが引用した阿含のフレーズは、すでに駒沢大学の袴谷憲昭教授が指摘しているように⁶⁾、パーリ

6) 袴谷憲昭「縁起と真如」『平川博士古稀記念仏教思想の諸問題』1985 所収, pp. 193-211, 後に同教授『本覚思想批判』pp. 88-108 (大蔵出版 1989) に再録。

相応部 xii.20, つまり、漢訳で言えば、『雑阿含』296 経から引用したものではなく、
 經典に現れる前後の文章から判断して、同じ「諸々の如来が誕生するしないにかかわ
 らず、云々」の言葉が含まれるところの、『雑阿含』ではこの經典から三つ後の上記
 B の「因縁相応 (NiS)」第 17 経からの引用であることが明らかになっている。これ
 は本庄良文氏の『俱舍論所依阿含全表』が示すシャマタデーヴァの引用阿含からも確
 認することができる⁷⁾。なおこの經典にはパーリ三藏中に対応経は存しない。これま
 での研究者は間違ったパーリ対応経で議論してきたのである。

ここでヴァスバンドゥは、上記の和訳を見ていただければ明らかなように、縁起を
 無為と見なす他部派の説を⁸⁾、引用された「因縁相応」第 17 経の經文解釈を通し
 て、十二の支分の順序が単に確定しているという関係自体は、それはそれで動かしよ
 うのないことであるから、その点では、縁起が常住であるという表現も許されるが、
 縁起が無為法としての「何らかの常住なる別の存在 (bhāvāntara)」であることは明
 確に否定しているのである。

ここで唯識思想そのものに議論を飛躍させることが許されるなら、例えば『唯識
 三十論』に見られる完成された唯識説においては、唯識派の主張する真理概念が「唯
 識性 (vijñaptimātratā)」という言葉で示されることになる。これは三性説で言えば、
 円成実性 (pariṇaṣṭasvabhāva) に相当し、円成実性は依他起性 (paratantrasvabhāva)
 の上に遍計所執性が存在しないこと、つまり「非存在」あるいは「無」という属性が
 あることにすぎないので、円成実性と依他起性は不一不異の関係にあり、従って円成
 実性が単独で存在しうる概念でないことは表明されてはいるが、筆者から見ると、唯
 識説は存在の背後にある円成実性、つまり唯識性 (vijñaptimātratā) という不滅の真理
 概念を認める方向にあることは否定しようがないのではないかと思う。これが『般若
 経』などの大乘經典でさかんに説かれる真如 (tathatā), 法界 (dharmatā), 法性
 (dharmatā) などと同一の真理概念を表すことは自明のことであろう⁹⁾。

縁起経釈 ではヴァスバンドゥにとって、経量部に立場を置いているとはいえ、唯識
 思想へと一歩踏み込んだ『縁起経釈』ではどうなのか。縁起が何らかの真理概念を表
 すものとして、あるいは真理概念そのものでなくとも、それにつながって行くような
 記述がそこにあるのかという点が問題になる。そこで注目すべきは『縁起経釈』最終
 章の記述である。そこでは『俱舍論』とほぼ同じテーマを扱ったパラグラフが存在す

7) 本庄良文『俱舍論所依阿含全表』pp. 38-39, chap. 3-[46].

8) ヤショーミトラによると化地部などの説ということになる (Yaś, vol. 1, p. 294, l. 4).

る。まず『縁起経釈』最終章の構成を見れば、以下のような四つのパラグラフから構成されていることが分かる¹⁰⁾。

1. 三帰依の規定の決択 66b2-67b2.
2. 縁起 (pratītyasamutpāda) の語義解釈の決択 67b2-69a5.
3. 縁起の dharmatā, dharmasthititā, dharmaniyāmatā の決択 69a5-69b3.
4. 無明と不染汚無知をめぐる問題の決択 69b3-71a4.

これら四項目のうち、第1項と第4項についてはかつて考察を加えたことがある¹¹⁾。残された2つの項目のうち、第3項の「縁起の dharmatā, dharmasthititā, dharmaniyāmatā」の中で、『俱舍論』のテーマと似た問題が扱われる。そこでは、上記「因縁相応」の同じ二經典のフレーズが取りあげられる。その部分を和訳で紹介すれば以下の通りである¹²⁾。

別な經典に「ここで (a) 法性 (dharmatā), (b) 法の確定性 (dharmasthititā), (c) 法の決定性 (dharmaniyāmatā) 云々…中略…これが縁起と言われる (NiS, 14-6)」と説かれているが、

(a) 法性 (dharmatā) とは何か。諸法の本質性 (bdag nīd, *ātmatā) に他ならない。つまり「これある時、彼あり (asmin satidaṃ bhavati)。これ生ずることから、彼生ず (asyotpādād idam utpadyate)」ということである。「生起 (utpāda)」とは、諸法が本質性を得ること (*dharmānām ātmatā-lābha) である。法性はどのように生起するのか。この法が他の法に縁りて本質性を得るのである。[「これあ

9) 例えば『般若経』における同様の表現を3箇所ばかり掲げると、(1) (api tu khalu subhūte u)tpādād vā tathāgatānām anutpādād vā tathāgatānām sthitaiva dharmāṇām (dharmatā) dharmasthititā dharmadhātu. (ADP-1, p. 153, l.10ff), (2) yasmāt tarhi śāradvatīputra utpādād vā tathāgatānām anutpādād vā tathāgatānām sthitaivaishā dharmāṇām dharmatā tathatā avitathatā ... (ADP-2, p. 90, l.8ff), (3) yaishāṃ caturjām āryasatyānām tathatā avitathatā dharmatā dharmadhātu dharmaniyāmatā dharmasthitā. yad utpādād vā tathāgatānām anutpādād vā tathāgatānām sthita eva dhātu... (ADP-2, p.119, l.25ff). さらに『稻竿経 (Śālistambhasūtra)』における同様の表現は pratītyasamutpāda iti kasmād ucyate? sahetukaḥ sapratyayo nāhetuko nāpratyaya [iti tasmāt pratītyasamutpāda] ity ucyate. tatra pratītyasamutpādalakṣaṇaṃ saṃkṣepata uktaṃ bhagavatā: idaṃpratyayatāphalam, utpādād vā tathāgatānām anutpādād vā sthitaivaishā dharmāṇām dharmatā [iti yāvād yad idaṃ] dharmatā dharmasthititā [dharmāpariṇāmatā] pratītyasamutpādānulomatā tathatā avitathatā anyatathatā bhūtā satyatā tattvam aviparītātā aviparyasteti (La Vallée Poussin reconst., p. 73).

10) 以下『縁起経釈』の頁番号はすべて北京版チベット語訳による。

11) 拙稿『Vasubandhuにおける三帰依の規定とその応用』『仏教学セミナー』39, 1984, pp. 1-16. および『成唯識論述記』の伝える世親『縁起論』について『印度学仏教学研究』35-1, 1986, pp. 388-391.

12) PSVy, 69a5-b3, 和訳にあたってはグナマティの復註を参照した (PSVyT, 278b6-279b3).

る時、彼あり、云々」という〕現在時の縁起が説かれることによって〔過・未を加えた〕三時の〔縁起〕も知られる故に、法性が説かれたのである。

(b) 法の確定性 (dharmasthititā) とは何か。その同じ法性に対してである。何故か。人為的なもの (kṛtrima) ではないという意味によってである。世尊によって「比丘たちよ、この縁起は私によって作られたものでもなく、他の人によって作られたものでもなく、如来が誕生するしないにかかわらず、この法性は確定していて、法の確定 (dharmasthiti) のための界 (dhātu) である (NiS, 17-4)」と説かれている如し。界 (dhātu) とは何か。それによってあるものがそれ以外のものの因となるところの特殊性 (bye brag, *viśeṣa) である。語義解釈 (nirukti) としては、それによって因性を保持するから界である。

(c) 法の決定性 (dharmaniyāmātā) とは何か。その同じ法性なるものに乱れないということである。

このようであれば〔「法の確定性」と「法の決定性」という〕法性の二つの〔同義〕語によって、絶えざるもの (ātyantika) と、必然的なもの (aikāntika) が説かれたのである。〔NS, 14-6 に示される〕それ以外の諸語は関連するものを説いたのであると理解すべし。

この箇所は、まず『別な經典に「ここで (a) 法性、(b) 法の確定性 (c) 法の決定性云々…中略…これが縁起と言われる (NiS, 14-6)」と説かれているが、』という書き出しで始まるが、この経文は、先の『俱舍論』とは逆に、パーリ相应部 xii.20 (Paccaya) に対応する梵文『雑阿含』「因縁相应」の第 14 経、つまり、漢訳で言えば、『雑阿含』296 経からの引用に他ならない。先に掲げた梵文テキスト中、実線で下線を付した部分がこれである。経文自体は長文で現れるが、和訳中に「中略」とあるのは、筆者が勝手に省略したのではなく、『縁起経釈』自身が梵文テキスト中の点線で示した箇所を「中略」の言葉を使って略形で引用しているのである。

ここでヴァスバンドゥは、(a) 法性 (dharmatā), (b) 法の確定性 (dharmasthititā), (c) 法の決定性 (dharmaniyāmātā) という三つの言葉を解釈しながら、これらの語に縁起の理法であるとか、何らかの真理概念であるとかといった解釈を施すことを全く行っていない。恐らくは、本稿の冒頭で述べたように、縁起という、時間的に先立つ条件に依存して他の物が生じるという、時間の連続の中で十二の支分の順序が確定していること、それが法性などの同義語で表されることを述べているにすぎないのである。関心を引くのは、(b) 法の確定性 (dharmasthititā) の項で、『俱舍論』では、縁

起を無為法を見なす他部派の典拠となった「因縁相応」の第17経、漢訳『雑阿含』299経の一文が、それに先立つ部分も含めて引用されることである。梵文テキストの下線部分がそれであるが、ここでも、その引用が何らかの縁起の理法があるなどといった典拠になっているのではない。

瑜伽論撰事分 ではここで『縁起経釈』を離れて、唯識思想の基本文献である『瑜伽論 (Yogācārabhūmi)』の中で、『雑阿含』の解説書とでもいうべき「撰事分 (Vastusaṃgrahaṇī)」がこれら二つの經典についてどのように言っているのか見ておきたい。その箇所は以下の通りである¹³⁾。

縁起と縁起した諸法は二つの因によって二つの部分に設定される。つまり、どのように流転するのか、何が流転するのかということである。ここで生存 (bhava) の十二支分が流転する。それらは所応の如く、正しい (rigs pa) 因と果の順序に従って流転するのである。その正しい因と果の順序が、無始時来より次々と連続する〔十二の支分〕のあり方 (lugs) であって、それが法性 (dharmatā) である。現在時の点からすれば法の確定性 (dharmasthititā) である。過去時の点からすれば法の決定性 (dharmaniyāmatā) である。…以下省略

ここでの文言は『縁起経釈』に現れるそれとは種々異なる点は見られるが、「撰事分」においても、予想通り『縁起経釈』と同方向の「法性」に関する理解が示されていると言ってよいと思う。

まとめ 以上紹介した文献から見えてくることは、縁起を無為法のリストに加える化地部等の教団と異なり、縁起を無為法のリストに最後まで加えることのなかった唯識学派としては当たり前のことと言えるのかもしれないが、一方で唯識学派は当然のように真如をそのリストに加えてもいる。これは縁起という本来は十二支の前後関係のみを表す概念に対して、好意的に見れば、最後まで仏教の原則に踏みとどまったということなのかもしれない。筆者の考えていることは、縁起なる概念は、空間的なものであるとか、相互に依存しあう関係であるとか、あるいは、何らかの実在する真理概念なのでは決してなく、単に過去から未来に向かう一方的な時間の流れの中でのみ成立しうる十二の支分の因果関係の確定という、あたりまえの仏教の大原則に他ならな

13) 大正 30, 833a-b, チベット語訳 D. ed., Zi 259a2ff. 向井亮『『瑜伽師地論』撰事分と『雑阿含経』』『北海道大学文学部紀要』33-2, 1985, pp. 1-41 参照。

いことである。ヴァスバンドゥという、やがては真如や法界といった真理概念を自明の理とする唯識思想を担う人物になる者でさえ、縁起について決して時間的因果関係以外のことは、自己のよって立つ仏教思想としては主張していないということには注意しておくべきであろう。

略号：

ADP-1 & 2: *Aṣṭādaśasāhasrikā Prajñāpāramitā*, Conze ed.

AKBh: *Abhidharmakośabhāṣya* by Vasubandhu, Pradhan ed.

Yaś: *Yaśomitra's Commentary*, Wogiwara ed.

NiS: Ch. Tripāṭhī, *Fünfundzwanzig Sūtras des Nidānasamyukta*, Berlin, 1962.

PSVy: *Pratītyasamutpādayākyā* by Vasubandhu, P. ed., No. 5496.

PSVyT: *Pratītyasamutpādayākyā-ṭikā* by Guṇamati P. ed., No. 5497.